

ふてしこ

10 '16 No.251

巡回通信誌



引用：The sankei shinbun & SANKEI DIGITAL

坂井 義則氏 (1945年~2014年)

当時19歳の陸上競技選手。

原子爆弾が広島に投下された1945年8月6日、広島県で生まれた。戦後復興と平和の象徴的存在として、最終聖火ランナーに選出されたそうである。

「1964年」

院長 林田 良三

1964年、昭和39年がどんな年だったのか、還暦を過ぎた世代にはピンと来る方も多いと思う。今からちょうど52年前、東京オリンピックが開催された年である。終戦から19年、日本は驚異的な復興を遂げ、アジアで初めて開催されるオリンピックを勝ち取った。1964年10月10日、国立霞ヶ丘競技場の聖火台に最終聖火ランナー、坂井義則氏により聖火が灯され、東京オリンピックの幕が切って落とされた。航空自衛隊ブルーインパルスが華麗なアクロバット飛行で青空に五色の五輪を描き、その様子は全国にテレビ放映され、国中がその世紀の祭典に熱狂した。10月10日は後に体育の日として休日となったことから国をあげての熱狂ぶりが伺える。テレビでみるスポーツといえば、野球か相撲くらいしかなかった時代、オリンピック競技は新鮮だった。金メダリストは一夜にしてスターとなり、子供達は今まで一度も聞いたこともなかった、舌を噛みそうになる外国人選手の名前を必死で覚えたものだ。ベラ・チャスラフスカ、ドン・ショランダー、レオニート・ジャボチンスキー、アントン・ヘーシンク、アベベ・ビキラ、ボブ・ヘイズといった金メダリストの名前が学校中で飛び交った。日本選手の活躍が期待される競技では授業を一時中断して、大広間

のたった一台のテレビの前にみんなが集まり、先生も一緒になって応援した。「東洋の魔女」と呼ばれた日本女子バレーボールチームがソビエト（現在のロシア）との決勝戦に勝って金メダルを獲得した時には日本中の熱狂が最高潮に達していた。近くのお年寄りが興奮のあまり、脳出血を起こして救急車で運ばれたという噂を後に聞いた。

当時の日本は戦後の第一次ベビーブームに生まれ、人口ピラミッドのなかで最大の集団である「団塊の世代」が15歳から17歳だったころである。「団塊の世代」の多くは後に都市部で若い労働力となり、高度成長期を支えることになる。街中に子供があふれていて、高齢化率は6.2%で、若さと活力に満ちた時代であったように思う。(ちなみに現在の高齢化率は26.7%である) 欧米と比べると決して豊かではなかったけれど、誰もが失ったものを取り返そうとするかのように前を向き、ひたむきに働き、豊かさを目指した。1964年の東京オリンピックは高度成長期の日本において、エポックを画するイベントとなった。

そのオリンピックが2020年また、東京にやってくる。しかし、今の日本は1964年の日本とは全く異なる国になっている。日本は世界でも有数の先進国となった。ITの進歩で街には情報があふれ、ありあまる食料は飽食の時代をもたらした。人々は豊かさ(?)を享受し、多種多様な価値観がはびこっている。世界の誰も経験したことのない高齢化社会となり、2020年には日本の高齢化率は30%に迫ると推計されている。そのような時代に一体どのような「東京オリンピック」が開催されるのであろうか。開催国決定時の裏金とおぼしき大金の問題。シンボルマーク、新国立競技場建設をめぐる一連の騒動。利権がらみのなんとなく臭い空気がただよっている。

1964年の「東京オリンピック」が国民の多くに活力と自信そして夢と希望を与えたように、2020年の「東京オリンピック」も閉塞感ただよう現代に一条の光となるような、そして成熟した国にふさわしいオリンピックとなることを切に願っている。

